東京バッハ合唱団 月報

［第 760 号］2025 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731　Fax 専用: 03-3290-5732　郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp　ホームページ http://bachchor-tokyo.jp ↑

BACH-CHOR TOKYO
Monthly Newsletter No.760
October 2025
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

今後の公演予定、現在練習中の曲

—— いろんな形で ご参加をお勧めします ——

秋風が吹いて、♫〈喜べや このよき日を〉の調べが練習場から響いてくる季節になりました。《クリスマス･オラトリオ》の冒頭です。

また、次回の定期公演に向けて、年初から 3 曲のカンタータの練習に励んでいることも、お伝えしたとおりです。

クリスマス音楽会 2025、今年も 2 会場で

バッハの《クリスマス･オラトリオ》BWV 248 は、全 6 部 64 曲からなる大曲で､当時のクリスマス大祝日期間（12/25～1/6）中の 6 回の礼拝に分けて、キリストの生誕物語を盛大に歌い奏でた作品です。

当合唱団では、全体を前半（Ⅰ部-Ⅲ部)、後半（Ⅳ部-Ⅵ部）に分けて、年末ごとに取り上げたり、主題を定めて一つのステージ用に抜粋版を構成したりしながら歌いつづけています。

今年の《オラトリオ》は抜粋バージョン（下掲囲みに詳細）により、いつものとおり都内 2 か所の会場をお借りして､それぞれに工夫を凝らしてお届けします。

❶ 12 月 6 日（土)、三崎町教会（250 席）

コンサート形式。今年は三崎町（神田）が先行します。バッハ音楽のバックボーンである「キリスト教」のご紹介を兼ねた本格的なクリスマスコンサートとして、みなさまをお待ちします。

「太鼓とラッパの､この響きがなければ歳も越せない」という《クリオラ》ファンのみなさま、お仲間お誘いあわせでご来場ください。

＜2025 年版抜粋の構成（大村恵美子･訳詞）＞

タイトル：“暗き夜は、今”（仮題）

1. 合唱〈喜べや このよき日を〉､以下コラール 4 曲（5, 9, 12, 17)、19. アリア（A）〈眠れいとしき御子よ〉、コラール（23）

24. 合唱〈あまつ君よ 聞きたまえ〉、25. レチタティーヴォ（T）〈み使いら去りて〉、26. 合唱〈いざや目ざさん〉、コラール（28)、29. 二重唱（SB）〈主よ ながき慈しみ〉、コラール（35）.

36. 合唱〈ささげん頌め歌を〉、以下コラール 4 曲（42, 46, 53, 59)、63. レチタティーヴォ（SATB）〈死の怖れは消え〉、64. コラール合唱〈あだは今しも〉

（どこかで 10. シンフォニア［器楽のみ］を挟みます）

❷ 12 月 13 日（土)、荻窪教会（50 席）

シングイン形式。荻窪教会での「クリオラ・シングイン」､すっかり定着しました。心得ありのＯＢ/ＯＧのみなさま、ドイツ語歌詞・大村訳歌詞、いずれも可。演奏者の熱気のただ中で鑑賞してくださるファンのみなさまも、出番です。歌唱部分の楽譜あり：200 円（荻窪のみ）

——以下、両会場とも——

近日中に詳細チラシが出来上がります。

＜開演時間と入場＞

開演 14 時（～15 時 30 分)、入場無料（カンパあり）

＜演奏者と主催＞

管弦楽：ＡＲＳ（アルモニア･スペリオーレ･コレギウム･ジャパン）

オルガン：田尻明葉、 合唱：東京バッハ合唱団

指揮：松尾茂春（団員）　東京バッハ合唱団・主催

絶品カンタータ 3 曲、歌ってみませんか（来年初夏）

次回第 124 回定期（2026 年 5 月/6 月）の曲目（カンタータ 3 曲）については、それぞれの聞きどころ、魅力について月報紙上でご紹介の最中です。

作曲家バッハ氏の技量とアイディアの粋を集めた頂点の 2 作（BWV 10、BWV 20)、若き日のみずみずしさ漂う BWV 196、読者のみなさま方にとっては、バッハ・カンタータの幅と奥行きを体験する絶好のチャンスです。挑戦してみてください。

既述のとおり、カンタータの練習の合間に「クリオラ･シングイン」に備えての合唱練習も加わりました（お客さまは、ぶっつけ本番が原則でも、迎える方はサラっています！)。10 月､11 月の各練習日（土曜日）は、綿密な時間割を用意して備えていますので、事務局にお問い合わせください。

シングインの《クリオラ》をかじりながら、来年のカンタータ演奏の合唱に加わる、というのは如何でしょう。まずは、見学がてら、荻窪会場へご訪問ください。

（入団の詳細は、当団ＨＰをご参照ねがいます）

月報 2025 年 10 月号　CONTENTS

・バッハ・カンタータの場景 No. 20
第 10 番《わが魂 主をあがめ》（大村健二）… p. 2-3
・連載：退屈するのはいそがしい［56］（大野博人）p. 4

マリアの讃歌、ふたたび

《わが魂　主をあがめ》BWV 10
Meine Seel erhebt den Herren

大村　健二（団員）

◆バッハによる「マリアの讃歌」、3 題

先の定期演奏会（第 123 回、本年 5/31 荻窪教会、6/7 三崎町教会）で、われわれは《マニフィカト（マリアの讃歌）ニ長調》BWV 243 を上演しました。

キリスト受胎を告知されたマリア（右図の左の人物）が、すでに身重であったエリサベト（後に洗礼者ヨハネの母となる）を訪問したおり、「あなたこそ主の母！」と、エリサベトから祝福を受けた。その熱いことばに感激して神への讃歌をとなえる。これが「マリアの讃歌」（ルカ 1, 39-56）と呼ばれ、古来キリスト教の歴史のなかで、種々の聖歌となって歌われつづけてきました。

ラテン語による「マニフィカト」もその一つ。讃歌の冒頭〈マニフィカト・アニマ・メア・ドミヌム……（わが魂　主をあがめ……）〉（ルカ 1, 46）の歌い出しをもって曲名とされました。月報紙面や上演プログラムの解説などでも触れたとおりです。

バッハの《マニフィカト》は、ルター派の「マリアのエリサベト訪問の祝日」（7 月 2 日）のために書かれたものでしたが（1733 年）、彼は、同祝日のために他に 2 曲のカンタータ作品を残しています。一つは人気のコラール“Jesu bleibet meine Freude〈イエス　わが喜び〉（別訳「主よ、人の望みの喜びよ」）“ をもつ第147 番（BWV 147）であり、もう一つが、ここでとりあげる第 10 番（BWV 10）のカンタータです。

◆カンタータ第 10 番の歌詞と構成

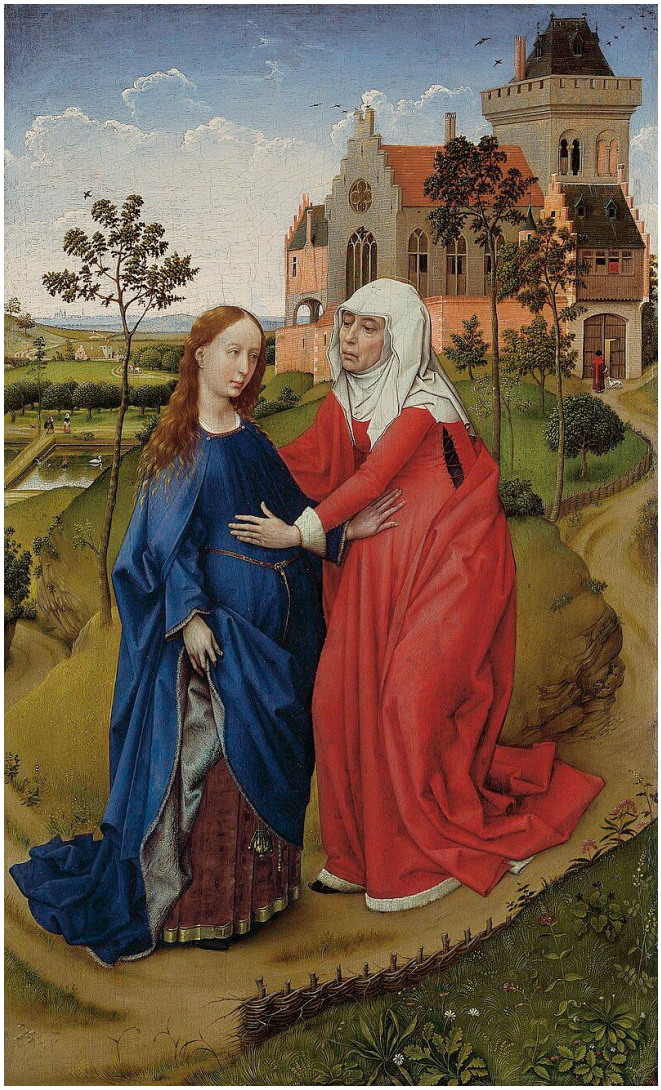
いつものように、この作品が演奏される日の聖書箇所に目をとおしておきましょう。教会暦では「ルカによる福音書」1 章 39-56 節が指定され、前半が「マリアがエリサベトを訪ねる」（39-45）、後半が「マリアの讃歌」（46-56）にあてられます。

カンタータ第 10 番の歌詞は、ルター訳聖書の上記箇所の後半（いわゆる「ドイツ語マニフィカト」）からの引用（第 1 曲、5 曲）と、各節ごとの、意味的にはかなり忠実な書替えによる楽曲に、終結（第 7 曲）として「グロリア・パトリ」（三位一体の小詠唱）を付加したもの（台本の作者は知られていません）。

・第 1 曲（4 声部合唱）：〈わが魂　主を崇め　救い主なる神をほめ讃う……〉［ルカ 1, 46-48 節をそのまま引用］

・第 2 曲（ソプラノ・アリア）：〈主　力ある神のみ名は　いと聖く……〉［49 節を、韻を整えるなど詩的に改編］

・第 3 曲（テノール・レチタティーヴォ）：〈主のまことは　日々に新た……〉［50-51 節を、同じく詩的に改編］



■「訪問の祝日」ロヒール・ファン・デル・ヴェイデン（Rogier van der Weyden）1440 ころ．ライプツィヒ美術館蔵．

・第 4 曲（バス・アリア）：〈強きを　み神は落としたもう……〉［52-53 節を、同じく詩的に改編］

・第 5 曲（アルト/テノール二重唱）：〈憐れみ忘れず　しもべイスラエルを……〉［54 節をそのまま引用］

・第 6 曲（テノール・レチタティーヴォ）：〈むかし　主　世に語り　約せしごとく……〉［55 節を、同じく詩的に改編］

・第 7 曲（コラール 4 声部合唱）：〈栄は　父と子にあれ　聖きみ霊に……〉［三位一体の小詠唱を付加］

［上演用訳詞全文はウェブサイトにあり（当ページ脚部参照）。

◆「訪問の祝日」の場景

「マリアの讃歌」の内容そのものを絵画化したものを、管見では思いつきません。トラ・ネタ・プーなどがはびこる、今日の世の情勢のなかでは、驕るものを落としめ、低きものを幸福にする図など、ぜひとも見てみたいものですが……（トラはトランプ、ネタはネタニヤフ、プーはプーチン、念のため）。

そのかわり、前段の場面、「マリアがエリサベトを訪ねる」は、人気の画題ですから選択に迷いますが、15 世紀のフランドルの傑作を掲げてみました。聖母マリアが身重のエリサベトを訪問した。マリアの挨拶を

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

聞いてエリザベトは聖霊に満たされ、マリアの幸いを祝福する。感激したマリアが、喜びと感謝と覚悟の思い（讃歌）を神に捧げた。いずれも妊娠中の、若いマリアの青の衣装と高齢のエリサベトの赤い衣装の対比、お互いのお腹に手を当てる思いやりに溢れたしぐさなど、印象に残ります。

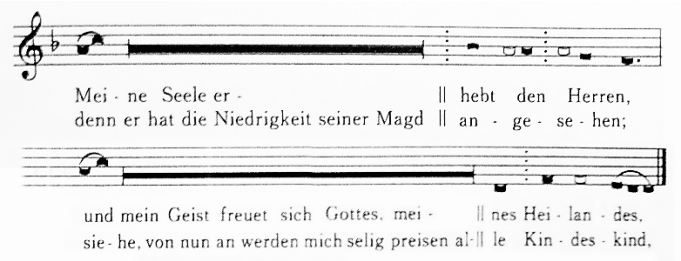
マリアの挨拶を聞いて、エリザベトの胎の児（後の洗礼者ヨハネ）が飛び跳ねた、というエピソードの、管楽器による描写が前出の第 147 番にあることはご存じでしょう（BWV 147 第 8 曲 11 小節）。

今回はルター訳「ドイツ語マニフィカト」“Meine Seel erhebt den Herrn（わが魂 主をあがめ）”に注目します。このルター訳を、バッハは“野心的な”新企画の「コラール・カンタータ年巻」（前月号参照）の第 5 作目に「コラール」として扱っています。

◆コラール・カンタータとしての主旋律

中世以来、カトリック教会においては晩課などでのマニフィカトの歌詞による典礼（マニフィカト唱）が必須でしたが、多くの旋法による譜例が残されています。しかし、ドイツ語圏では、マニフィカト唱専用の独特な“peregrinus”（異国風の、例外の）旋律が伝統的に用いられていたようで、とくに宗教改革期以降では、ルターが自らのドイツ語訳“Meine Seel erhebt den Herrn”をこの旋律に乗せたものが定着し、バッハ時代にまで受け継がれて馴染まれていたようです（**右上譜例**）。

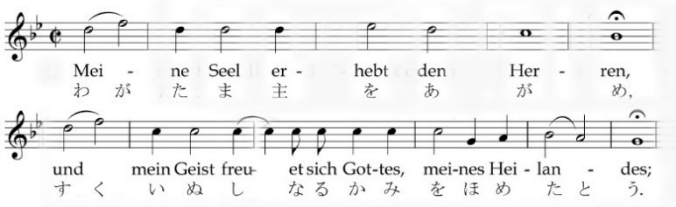
バッハがこの聖歌を、新しい「訪問の祝日」用カンタータの基本の素材に選び、新企画の作品集の一曲に



●小学館『バッハ全集』第 1 巻 p. 262 に所載の譜例を加工

加えたわけで、いわゆるコラール＝讃美歌とは異質な感覚です。

以下が、冒頭合唱の主旋律（ソプラノ）：



●春秋社『バッハ コラールハンドブック』p. 181 に所載の譜例を加工

われわれが、前回定演で上演した《マニフィカト》BWV 243 の第 10 曲、ソプラノ 2 声とアルトによる三重唱〈しもべイスラエルを救いたまえり〉（Suscepit Israel）の背後に、2 本のオーボエがユニゾンで静かにかつ厳粛に奏でていたのが、この旋律でした。

カンタータ第 10 番の基本コラールとして扱ったドイツ語マニフィカトは、冒頭につづいて第 5 曲二重唱（アルト/テノール）に聖句からの引用として歌詞のみ採られ（2, 54）、また第 7 曲コラールでは、単純な 4 声部合唱のかたちで詞・旋律ともに再現されますが、ここでの歌詞は付加節の頌栄となり、見事に音楽を締めくくります。

旋律に魅力があり、和声の重なりやズレや歪みが面白く、楽曲ごとのバリエーションが絶妙であり、声があり、器楽があり、そのうえ、テクストが世の軽薄と悪意を抑えて、やさしさと平安を伝えてくれる……、バッハのカンタータの醍醐味です。

300 年昔の、遠い異教の地の文化。日本で言えば江戸時代中期、ピンときませんが、ひい爺さんの、そのまたひい爺さんの時代あたりに行きつくようです。みなさんも、だいたいその辺でしょうか？ そんな大昔の音楽が、これほどの魅力を届けてくれるとは、ありがたいかぎりです。

カンタータ第 10 番《わが魂 主を崇（あが）め》
Meine Seel erhebt den Herren　BWV 10

［教会暦］マリアのエリサベト訪問の祝日（7/2 固定）.（他に BWV 147, Magnificat BWV 243）
［使徒書］イザヤ 11,1-5（メシア到来の預言）
［福音書］ルカ 1,39-56（マリアのエリザベト訪問、「マリアの讃歌」）
［成立］初演 1724 年 7 月 2 日（第 2 年巻第 5 作）。再演 1740～47 年
［歌詞］「マニフィカト」のドイツ語訳（ルター）に基づくコラール・カンタータ風構成、台本作者不明。旋律は、グレゴリア聖歌「マニフィカト」に由来。第 1 曲）1-4 節、第 2 曲）5 節を改編、第 3 曲）6,7 節を改編、第 4 曲）8,9 節を改編、第 5 曲）10 節、第 6 曲）11 節を改編、第 7 曲）三位一体の頌栄（ドイツ語）
［編成］独唱 SATB、合唱、トランペット、オーボエ 2、弦合奏、通奏低音

［楽曲構成］

楽章	冒頭句　原詞/訳詞	編成/調
1.合唱	**Meine Seel erhebt den Herren** わが魂（たま） 主を崇め	tp,ob2,str,bc ト短調
2.アリア （S）	Herr, der du stark und mächtig bist 主，力ある神のみ名は	ob2, str, bc 変ロ長調
3.Recit （T）	Des Höchsten Güt und Treu 主の真実(まこと)は日々新し	bc
4.アリア （B）	Gewaltige stößt Gott vom Stuhl 強き者を落としめたもう 権力の座より下に	bc ヘ長調
5.二重唱 （A/T）	**Er denket der Barmherzigkeit** 憐れみ 忘れず　（tp、ob：コラール旋律）	tp, bc ニ短調
6.Recit （T）	Was Gott den Vätern alter Zeiten むかし主 世に語り	str,bc
7.コラール	**Lob und Preis sei Gott dem Vater und dem Sohn**　栄えは 父と子にあれ（頌栄）	tp,ob2,str,bc ト短調

［演奏時間］約 20 分

［上演用訳詞］大村恵美子 http://ss964897.stars.ne.jp/bwv010.htm
［上演履歴］1993（#74）、2026 予定

■秋色とりどり（撮影：千葉光雄、2022 年 11 月）

◆月報バックナンバーは，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［56］

選択肢

安曇野閑人　**大野 博人**

たとえば、新しいスマホを買う、あるいはふだんの支払いの口座やクレジットカードを切り替える。手続きはどうすればいいのかな、とそれぞれの会社のサイトにアクセスしてみる。

そこから泥沼が始まる。

まず、すでにそれぞれの会社に顧客として「アカウント」を持っているかどうかと問われる。覚えていない。たぶんない、となると「新しく登録」を求められる。名前や住所、電話番号、メールアドレス、年齢まで書かされたあげく、「個人情報の取り扱い」についての長い文章を読んで承認しろという。ろくに読まないまま、読んだことにする。まんまと個人情報が吸い取られる。

やっと登録に進むと、その後、次々と「選択肢」の波が襲いかかる。「何をしたいのか」についてのいくつもの選択肢だ。スマホであれば、支払いの方法やら Wi-Fi の設定やら古いスマホからのデータの移し替えやらアプリの再登録やら……。

どの選択肢にもさらに細かい枝分かれがあって、どれかを選べと迫られる。選んでもまた枝分かれ。そんな段階をいくつか通り抜けても、一回間違えるとまた最初に戻る。

繰り返すうちに面倒くさくなって、問い合わせ先を探す。電話番号が見つかった。よし、直接話をして教えてもらおう。

だが、ここにも別の泥沼がある。

まずかからない。やっとかかったら音声ガイドが選択肢を挙げる。知りたいことについて、当てはまると思った番号をスマホのプッシュボタンで押せと言われる。それを何回か繰り返す。

一回ごとに最低でも 3 つの選択肢を示される。これを 4 段階まで進むとそれだけでも、選択肢は 3 の 4 乗、つまり 81 になる。5 段階まで進めば 243 だ、などと計算して、ほんとうにそんなたくさん用意しているのだろうか。いぶかっていると直接オペレーターに話す選択肢も出てきた。これだ、と選ぶと「混み合っているのでお待ちください」あるいは「後でかけなおしてください」とアナウンスが流れる。

作業を始めてからかれこれ 2 時間近い。なんどもかけ直すうち、「本日の営業時間は終了しました」と音声ガイド。この日が金曜日だったのが運の尽き。次々と現れる岐路、選択肢をくぐり抜けたあげく、問題解決は月曜の朝まで先延ばしになった。

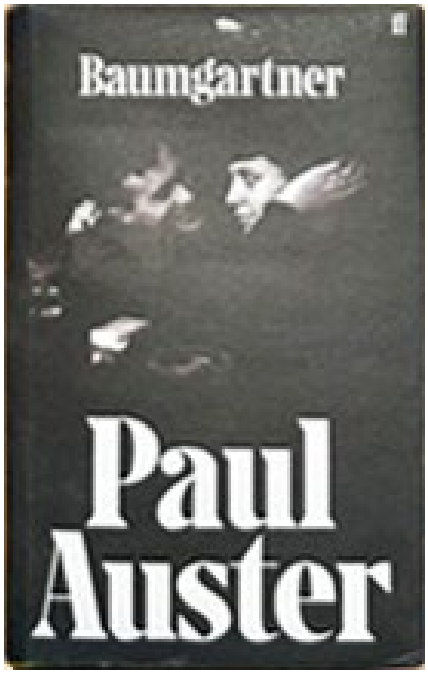
行き着く先が全部はずれになっている長い「あみだくじ」をやらされたような徒労感。

ものごとを前に進めようとしても、方向を自分で決めることができない。必ずあらかじめ選択肢が用意されていて、そこから以外は選べない。選び続けるうちに、どうも望んでいたのとはまったく別のところに誘導されているような気がする。やがて、いったい自分は何をやりたかったのだろう、と考え込んでしまう。

なんだか人生のようだ、とため息。岐路に直面するたびに、自分で道を切り拓くというより、既存の選択肢からどれかを選ぶだけ。進学も就職も趣味も……。

妙に落ち込んでしまったのは、ある本を読んだばかりだったからかもしれない。

昨年亡くなった米国の人気作家、ポール・オースターの小説『バウムガートナー』。彼の遺作だ。主人公は 70 代の大学の哲学教授。ずいぶん前に妻を亡くしていてさえない一人暮らしをしている。



■ポール・オースターの遺作『バウムガートナー』（2023 年、ニューヨーク）

主人公やその周辺の人たちの人生が、限られた数の選択肢の中からどれかを採ることを迫られた結果として織りなされていく。とりわけ主人公の祖父と父親の例が印象に残った。

祖父は東欧からの移民で知的好奇心が旺盛な人物だった。言語学者になることを夢見ていたが、家計を助けるため靴職人としての人生を選ぶ。父親も苦境にある家族を支えるため、学業を断念し弁護士になる夢を諦める。それぞれの人生の選択は正しかったのか。

こんな一節があった。

「正しい選択肢と間違った選択肢があったわけではない。二つの正しい選択肢があっただけだ。だが、それがどちらも結局は間違っていたということになる」

切ないなあ。

さて、今日は月曜日。はずれしかなさそうな「あみだくじ」にまた取りかかるとするか。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

［編集後記］

ここ数年、当団では、BWV の若い番号の作品を多く取り上げています。日本語版カンタータ楽譜全集の未刊分を、頭から選曲しつつ世に出す、という企画に着手しているからです。

2023 年…BWV 11・BWV 12・BWV 22（以上、前々回定演）
2025 年…BWV 23・BWV 34（前回、他に「マニフィカト」）
2026 年…BWV 10・BWV 20（次回予定、他に BWV 196）

当初公表の計画からは、ペースがだいぶ遅れてきました。既刊 86 曲、残 106 曲。前途［冒遥］といったところ。

それにしても、改めて「カンタータ、名曲の宝庫」実感！（K）